

こころの言の葉

～ 第13集 伝えられ つながれ この思い ～



平成27年度「こころの言の葉」コンクール作品集
鹿児島市教育委員会 編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今年度は十三回目を迎えました。

本事業には、面と向かつては、恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は過去最高の一万六千八百二点。また、親の部の応募も四年連続千点を超え、こちらも過去最高の数となり「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることを伺うことができました。

この作品集には、中学生の子どもと親が、お互いに向けて宛てた四十四編のメッセージが掲載されています。心からの感謝を素直に伝える言葉。不安で揺れる思いをぶつける言葉。遠慮がちに、自分のささやかな願いをつぶやく言葉。反抗期の自分を持って余しながら不満と感謝の気持ちをつづける言葉。我が子の反抗期に戸惑いながらも大きな心で受け止める言葉……。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様にご心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十八年二月

目次

「想いを伝える」言の葉

—子から親へ—	4
たまには顔を合わせて話しませんか	5
顔が似てない仲良し親子	6
お父さんへ	7
母の涙	8
お願い	9
手紙	10
自分のことだから	11
将来の夢	12
僕にも任せてください	13
母の手	13

「想いをつなげる」言の葉

—親から子へ—	15
宝物	16
父親の想い	17
あなたに甘えていました	18
一等賞	19
どんなにころころ変わっても	20
白い月	21
子育てとは己育て	22
おにぎり	23
もう一回教えて	24
さあ ようこそ	24
いらっしやいませ	24

「想いを交える」言の葉

—子から親へ—	26
自分にとって親とは	26
私の不満	27
私のあこがれ	27
メッセージ	27
母の応援	28
挨拶	28
大切な時間	29
私のわがまを聞いてくれたらうれしいです	29
お父さんのドヤ顔とギャグ	30
怒られて嬉しくなる魔法	30
第二のおかあさんへ	31
私の隣	31

「想いを重ねる」言の葉

—親から子へ—	33
修行と生きていたけれど	33
欲張りなわたし	34
くそババアになる前に	34
あなたの手	34
お母さんとそっくりね	35
おかえりなさい	35
小言と反省	36
うれしい出来事	36
あたたかい言葉	37
預かりもの	37
ハイタッチ	38
反抗期	38

平成二十七年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	40
平成二十七年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	41
審査員講評	41
編集後記	42

「想いを伝える」言の葉

—子から親へ—



たまには顔を合わせて話しませんか

いつも身近な存在となっているけれど、まだまだ本当のことが言えてないです。言い出したいと思っているけれど、どうせ口論になる。どうせまた傷つくかもしれないといつも心が鎖でつながれているようで、なかなか言い出せない。

正直に言うと僕は自分が嫌いでもうしようもなく、いつも自分を追いつめています。自分がこんなことをしたからこうなった。だから全て自分の責任だと、悪いことをしていなくてもそう思ってしまう。

いつも心の中で、矛と盾が戦い合っているようで、耐えることができなくなりそうな時もある。自分を守る盾が今にも矛で突かれて壊れそうになる時は、自分が自分でなくなるようで怖い。怒られた後だろうと戦っていて今にも負けそうになる不安な気持ちを聞いて欲しいなと思います。

顔が似てない仲良し親子

いつからだったかな。お父さんと口をきくのが本当に大事な用事の時だけになったのは。前はもっと仲良しだったのに。誰が見ても「顔が似てない仲良し親子」だった。

私と父は血が繋がっていない。私が小学校に入学する少し前、父は私の『お父さん』になった。その時は、嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。

なのに今は、悲しい。全く似ていないことでも、すぐ怒ることでもない。もっと、お父さんと話したい。前みたいに、家族全員で話が途切れることなく夕食を食べたい。

だから、私のためにも、家族のためにももっと早く帰ってきてね。私も、列車に乗り遅れないように走るから。

いつか、二人で話せるその日まで、毎日私は走り続けたい……。

お父さんへ

私は昔からお母さん子だね。

お父さんの横には近寄らないし、二人で写真を撮るときはムスツとした顔。

全然自慢の娘じゃないと思う。

それでもお父さんの部屋には、私が小さいころ、誕生日プレゼントにとお母さんから
いやいや書かされたへんてこな似顔絵や工作、汚い字の手紙が大事に保管されている。

こんなのまだあったんだってびっくりした。

恥ずかしいから捨ててって言ったけど、本当はすごくうれしかった。

素直な娘じゃなくてごめんなさい。

成人したら、一緒にお酒飲むって約束、私も楽しみにしています。



母の涙

私の母は我慢強いです。

私は中学一年生のときに不登校になってしまいました。

ずっと家にいて笑顔を見せなくなった私をどうにかしようと、よく仕事を休んで外へ連れ出してくれました。母は私を責めることなく何も話さない私にずっと寄り添ってくれました。

ある日、私が学校に行くと言ったときに、あの我慢強い母が泣いていました。声をあげて泣いていました。

今まで私の前では泣くまいと涙を見せなかった母に、今、「ありがとう」の言葉でいっぱいです。

お願い

「ねえ、勉強してんの？」

「起きなさい！」

「今時間わかってるの？」

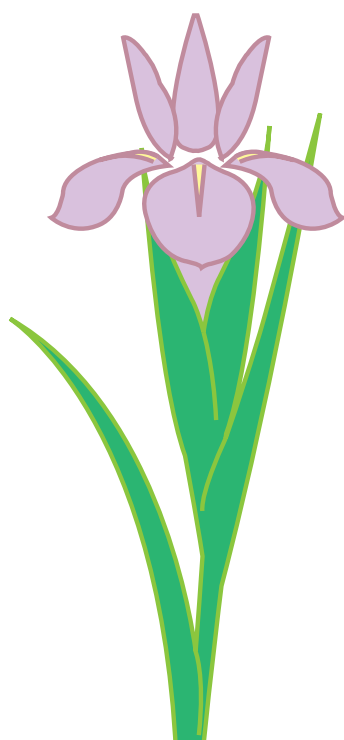
「マジめんどくさい。わかっとるわ！」

って言ったら、もっと面倒くさくなる。

今からしようと思ってたものを言われると、チョー腹が立つ。マジだるい。

でも実際、これで何度も助けられたことがある。

親へのありがたみを分かってないってことは、分かっている。けど「思春期」のオレにあれこれ言われてもできねえよ。でも、文句を言うタイミングが悪いだけで、言うなどは言っていない。言ってほしくないけどねえ。……いつもお世話になってます。



手紙

「お誕生日、おめでとう。もう〇才になりましたね。」

毎年、同じ言葉から始まる誕生日の手紙には、母の美しい文字が並ぶ。多忙で、一日のうちに私とゆっくり会話をする時間がなかなかない母は、私の誕生日に長文の手紙をくれる。多忙な母が私にくれる手紙は一年に一通。母には言わないけれど、母の手紙はつらいときや悲しいときに、読み返す私の心の支えだ。

手紙の最後にあるいつもの言葉。「私はずっとあなたの味方です。」という言葉は、毎年、涙が出てしまうくらいうれしい。本当にありがとう。

今年から、私も母のお誕生日には手紙を書きたいと思う。少し照れてしまうかもしれないけれど、ちゃんと書く。私の手紙が母の心の支えに少しでもなりますようにと願いを込めて……。

自分のことだから

お母さん、この前「ママは厳しすぎるよ！」って言ったよね。携帯の使い方、友達と遊びに行ける場所……。冷たい雰囲気の中でお互いの意見をぶつけ合ったよね。

お母さんが私のことを心配してくれているのは嬉しい。けどね、私からすると、狭い箱に入れられたような、とっっても窮屈な気分。友達から「○○に遊びに行こ。」って言うってもらったときに、「お母さんが許してくれないから。」って断るのすっごくつらい。

もう中学生だから、そんなにカバーしてもらわなくても大丈夫。自分のことだから、なるべく自分で決めたい。お母さんの思い通りにはならないと思うけれど、中学生ライフを楽しんで、いい思い出をたくさんつくりたい。

もし、この手紙をお母さんが見つけたら、きっと怒るんだろうけど、これが私の本音です。

将来の夢

家族で話をしていたとき、

「将来は何になりたいの？」

と聞かれた。そのときは

「看護師か薬剤師かなあ。」

って言ったけれど、

本当の私の将来の夢は、

お父さんみたいな人と結婚して、

お母さんみたいな母親になること。

どうやったらなれるかな。

今は勉強よりもそっちの方が気になるんだけどな。



僕にも任せてください

僕の父は、警備会社で働いている。毎日夜遅く帰ってきて、リビングで寝ている。

そして父は、僕の学校のPTA会長でもある。

父は、僕の友達から怖そうに見えるによく言われる。小さい子にもよく泣かれる。でも本当はとても優しい。疲れているはずなのに、休みの日は、僕たち家族のために時間を使ってくれる。仕事が忙しいはずなのに、僕が習っている水泳に迎えに来てくれる。そして僕たちの学校のために、PTA会長としてさまざまな仕事をしていている。自分のことより、僕たち家族や他の人を優先して行動するそんな父を、僕はとても誇りに思う。

「お父さん、あまり無理をしないでください。僕も、もう中学三年生。お父さんの手伝いもできるようになったと思います。一人でしないで、これからはいろんなことを僕にも任せてください。」

母の手

母の手をよく見たことはありませんか。

たぶん、ほとんどの人があまりよく見たことは無いと思います。

皿洗いを後ろから見てみると、母の手はあかぎれやたくさんの細かい傷がありました。本当はとても弱々しく見えるはずですが、何故か、母の手は力強さと優しさがみまぎっている感じがしました。

自分が生まれてきた時から、いろいろな時間を母と過ごし、泣いた時は頭をなでられ、悪いことをしたら、たたかれ、ほめられた時、いいことをした時は抱きしめられたこともあった母の手。

これからは僕が、母と母の手を優しく包んでいきたいです。



「想いをつなげる」言の葉

— 親から子へ —



宝物

紙きれで

もらった手紙も

宝物



父親の想い

自分は親の愛を感じたことがない。

たまに思う、親とは何か……。

こんな自分が父親でよいのか、恥と感じていないのか？

こんな父親でごめん。

お前の成長は、母さんからいつも聞いているよ。

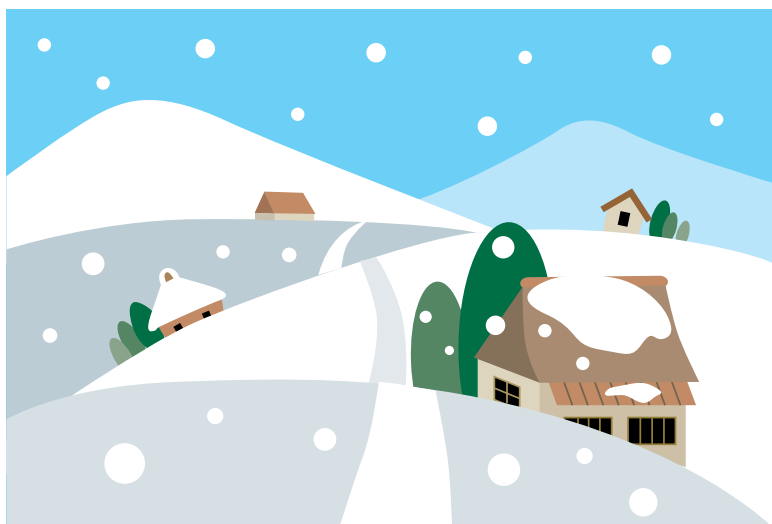
お前の成長は、いつもうれしく思う。

だから、オレもがんばれるんだと思う。

お前から学ぶことがたくさんあった。

これからもお前から学び、成長するから、

お前もガンバレ！



あなたに甘えていました

何年前だったかな。次女が「お母さんみたいな看護師になりたい。」って言った時、三女のあなたは「看護師にはなりたくない。自分の子供がかわいそう。」と言いました。

お母さんは、子供を三人産み育てながら、この仕事を続けました。病院には患者さんがいるので昼も夜も、日曜も祝祭日もありません。限られた時間の中でたくさんのお仕事をこなすには、何か犠牲になっているんですね。それを思い知らされたのが「子供がかわいそう。」というあなたの言葉でした。

くたくたになって帰り着くと、台の上に「おかえり」の手紙。最後には必ず「ママ大好き」って書いてくれました。その言葉に甘えていました。どんな気持ちで書いていたのか知りもせず、自分だけが優しさをもらって返事も書かなかったね。ごめんね。そして本当にありがとうね。あなたは大切な大切な娘です。心から誇りに思っています。

一等賞

素直で元気な子に育ちますようにと名付けた名前のおり、君は、大きなケガや病気もせず成長してくれて嬉しく思います。小さい頃は、よくおどけて見せて楽しませてくれました。時には、言うことを聞かずに家の外に立たせたこともありましたね。

それでも父さんは、良くも悪くも子供らしい子供だと、小さな君を見るたびに微笑ましく成長が楽しみだと思っていました。

そんな君も中学生になり、勉強や部活に頑張っていますね。成績が振るわなかったり、試合に出られなかったりと思うようにいかないこともあるだろう。「どうしたら褒めてくれるの？」と君は言うけれど、父さんも母さんも君が頑張っていることは分かっているよ。

君は、一番にならないと父さんや母さんは褒めてくれないと思ってる？

それならとっくの昔から一番は取ってるよ。

君は生まれてからずっと父さんや母さんにとって、一等賞なのだから……。



どんなにころころ変わっても

最近の娘は、まるで猫の目のようだ。

ころころ表情が変わる。笑顔から無表情に。ころころ気分が変わる。鼻歌からだんまりに。

機嫌が変わる。体調が変わる。言葉遣いが変わる。いろいろ変わる。ほら、また変わった。

フーン。これがこの子の思春期かあ。

フーン。なかなか、おもしろいぞ。

大丈夫。どんなにころころ変わっても。お母さんはどーんと構えて見ています。

あなたがどんなにころころ変わっても、お母さんは変わらない。

どんなあなたも大好きだよ。応援してるよ。



白い月

君が生まれた日、

少しずつ明るくなる空に

白い月が浮かんでいました。

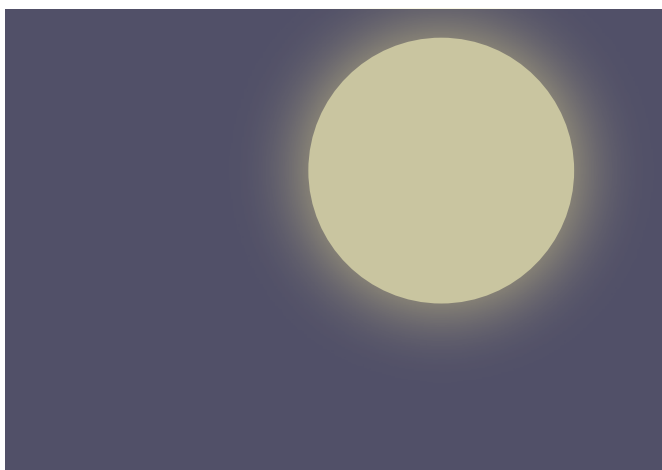
君のおかげで親になり、

たくさん喜びや感動を知りました。

早朝に白い月を見付けると、

今でも人生が豊かになった

あの日を思い出します。



子育てとは己育て

食べ物の好き嫌いが多かった私が妊娠したことで、子供のためと思えば嫌いな物も食べることが出来た。

不規則な生活も、子供と共に規則正しい生活になった。

人付き合いが苦手だったのに、子供の学校入学によって付き合いの幅が広がった。

子どもを育てているつもりが、実は自分が育ててもらっているんだよね。私を母親にしてくれてありがとう。

おにぎり

自分の夢に向かって頑張っている貴女。あなた

小さい時からの夢に向かって一步一步計画的に進んでいる貴女は誰に似たんでしょう。私が今、貴女にしてあげられることは、毎日のお弁当を作ることです。

しかし、私が作る弁当は男の作る豪快な弁当です。

大きくていびつな丸いおにぎりやご飯の上に焼いて乗せただけのシヤケ弁もあります。そんな弁当は、一緒に食べる友達には、びっくりする弁当だったみたいですね。

「クラスで話題になったよ。」と、貴女は笑って私に話してくれましたね。

貴女は、私が作る弁当に決して文句は言いません。いつも残さず綺麗に食べてくれます。私も綺麗に食べてくれます。

でも、友達とお弁当を見せ合いながら食べている話をして、私に大きなプレッシャーをかけてもくれます。

貴女が夢に向かってるように、私も綺麗な三角おにぎりが作れるように頑張りますね。

もう一回教えて

「だ・か・らっ！」

今までにこやかに学校の話をしていたのに、急に怒り出す。そりゃ、何回教えてもらっても、しっかり理解していない母も悪いけれど、そんなに不機嫌にならなくても……。

これが思春期の始まりか……と思いつつ、ふてくされているあなたの表情を、そっとうかがう。幼さの残る顔に、全身で怒ってるぞを表現しているアンバランスな姿に、吹き出しそうになるけれど、ここで笑ったらまた怒るから、ぐっとこらえてこう言う。

「ごめん、もう一回教えて」

めんどくさいな、仕方ないなという表情で、ボソボソと話の続きをする顔がかわいくてかわいくて。

ごめんね。そのかわいい顔を見たくて、わざと忘れたふりをしているときもあるんだよ。

さあ ようこそ いらっしやいませ

「またおにぎりに海苔巻いてる！ もう！ 歯に付くからやめてって言ったよ！」

「ごめん、忘れてた……。でもそんな言い方するなら自分で作りなさいよ！」
ちよっと前まではお互いこんな感じだったよね。

お母さんね、やっと思い出したの。お母さんも中学校の時、イライラ・ポンポン・モー！虫を飼っていたのを。亡くなったおばあちゃんがありとあらゆる秘策で退治してくれたこと。そして毎回登場するたびに、「大丈夫よ、お母さんが一緒に退治してあげる。抱きしめたり、優しい言葉をかけたり、愛情ビーム光線に弱い虫なのよ。次の移民時期までうちに居る間は、いっぱいおもてなしして送り出してあげようね……。』って言われてたこと。あの時は、本当に愛情ビーム光線いっぱいありがとう。いつか伝えたいな……。

だから今は、どんなにあなたの心が悪天候になっても、お母さんが頑丈で、丈夫なカップを着て、心の燃料をしっかりとチャージしていっぱい降りそそぐ大雨を、しっかり受け止めてあげますよ。だから安心していいのよ。イライラ・ポンポン虫が去った後は、家族にもっともって幸せをもたらすっていうおばあちゃんの言葉を今でも信じてる。

さあ今日も充電完了。いつでもおいで。お待ちしています。フフフ……。

「想いを交える」言葉の葉

—子から親へ—



自分にとって親とは

会いたくない時がある
話したくない時もある
居なくなってほしい時もある
うざくて、だるくて、うるさくて
心を許せない時もある
でも
ずっと会わなかったら、さみしくて
ずっと話さないと、つまらなくて
居なくなったら、かなしくて、ツラくなる
不要なようで
一番必要な存在
ただ身近に居すぎて分からないだけ
いつもケンカばかりだけど
いつも本当に感謝しています
ありがとう

私の不満

私は、父に対して不満があります。
一つ目は、父が私に用があると、家の中
でも私の携帯電話に連絡してくることです。
私が父のとなりの部屋にいるときも電話
をしてくるので、嫌です。少しの距離くら
い動けばいいのにも思います。
二つ目は、とても騒がしいところです。
楽しいときもあります。が、イライラしてい
るときにそんなことをされるともっとイラ
イラしてしまいます。
独り言なのか私にしゃべりかけているの
か、分からないところも嫌です。はっきり
話してほしいです。
でも、これらは父の良いところなのかも
しれません。私は嫌ですが。

私のあこがれ

先日、自分の部屋のそうじをしていると、ある一冊のアルバムが出てきた。父と母の結婚式のアルバムだった。二人は若くて本当に幸せそうだった。母は正直、別人だと思うくらい美しく、父は今より少しやせていた。

このことを話すと、二人とも「そんな時があったわね。」なんて口をそろえて言う。その後は、父が「昔はきれいだった。」母は、「今よりやせていた。」などと言い合っている。そんな光景を見て少しあきれれるが、すてきな夫婦だと思う。私のあこがれだ。母が昔の人は自分の父と似ている人と結婚する、と言っていた。実際、母がそうらしい。私が、「よかったの？」と聞くと、「うん、そうですね。」と照れながら教えてくれた。笑ってしまいうくらい自分も恥ずかしくなるが、少しうれしい。私の親はあこがれの夫婦だ。私もそうになれるかな。

メッセージ

「勉強しなさい。」わかってる。今からやるよ。

「手伝いしなさい。」言われなくてもやるってば。

「きちんとしなさい。」もうやってるし。

「小言を言わない。」言ってるのはそっちでしょ。

「だらだらしない。」休日だからいいじゃない。

「きちんとしなさい。」何度も言わないで。

親から一つ一つのメッセージ。わかってること、何度も言われ、イライラする。ムカムカする。

でも、それは親からのプレゼント。

私が将来大きくなって生きていくためのメッセージ。

そんなプレゼントをありがとう。どうもどうもありがとう。これからは大切にしますね。私の親たちからのメッセージ。

母の応援

(うるさくってば。分かってるよ！)

私の母は、とにかく熱いです。試合中に恥ずかしくなるほどの大きな声で

「足動いてないよ。」

「慌てないで。」

などとアドバイスをしてきます。

自分でいろいろ考えて集中している時は、母をにらんでしまいます。

それに怒った母は、

「もう応援には来ないから。」

と言い、次の試合は見に來ませんでした。

母の応援がなく静かに集中できると思っていたのに、全然だめでした。母の応援がないと不安で仕方なかったです。

あと一週間で、中学時代の集大成である県大会があります。日頃の感謝の気持ちを込めて、がむしゃらに頑張ります。だからお母さん。大きな声の応援よろしくね。

挨拶

私は親と挨拶をしない。

「おはよう。」

と言われても

「……おはよ。」

と小さな声で。

「いってらっしゃい。」

と言われても

「いってきます。」と言わず、

「……うん。」と返すだけ。

学校ではできるのに、家ではできないのはなぜ？

答えは「恥ずかしい」からだ。

親をうざったく思い、大切にしていない。

このことに気付いた私はこれから親を大切に、挨拶をしていきたい。

そして今日は自分から

「おはよう。」

と言ってみた。その瞬間、風が吹き、目の前が明るくなったような気がした。



大切な時間

私とお母さんには、毎日ティータイムという時間があります。

ケンカをしていても、テスト期間でも、毎日夜の十時ぐらいになると一階から、

「ティータイムするが。」

というお母さんの声がします。

お母さんはお茶を飲みながら、楽しい話や悲しい話をしたり、聞いたりしてくれます。中学生になってからの私は、小学生の頃よりたくさん悩むようになり、いつもお母さんに相談します。

どんな友達よりも一番お母さんが私のことを理解して、たくさん言葉をかけてくれます。

私たちのお茶にはいろいろな味があります。大人になってからはできないこの瞬間を、今は大切にしていきたいです。

私のわがまを聞いてくれたらうれしいです

毎週土曜と日曜日、ほとんど私は一人です。なぜなら、父は単身赴任で家にいないし、母は弟のサッカーの試合に行くからです。

サッカーが大好きで大好きで仕方ない弟。だから、練習もとても頑張っています。試合も毎週のようにあります。試合の日の夜ごはんのときの話題は、もちろんその日の試合のことが中心。私は、なかなか入れません。

お母さん、私のわがまを一つだけ聞いてくれますか。試合があるのは、仕方がないし、何か好きなことを一生懸命に頑張っている弟は、かっこいいしうらやましいです。

だけど、たまには、ちょっとでもいいから、私との時間もつくってくれたらうれしいです。わがままでごめんね。たまにはでもいいからね。

無理はしないでもいいからね。

お父さんのドヤ顔とギャグ

私の父は、いつも私を笑わせてくれます。三年前ぐらいから特におやじギャグがひどいです。そして言うときには必ずドヤ顔です。テレビで得たものを自分のもののように少年のように披露してくれます。母と姉は父がギャグを言うと、いつもシカトします。でも私は、その冷めた感じと父のドヤ顔がとても面白くて大好きです。五十歳になるとおやじギャグがひどくなるっていうのは、本当だととても思います。

そんな父がギャグを言わないととても心配になります。あの父のドヤ顔と、さほどウケないギャグが父の元気のバロメーターになっているのかもしれない。



怒られて嬉しくなる魔法

怒られても嬉しい。それはなぜだろう？
母に毎日怒られる。

勉強をしろだとか、どんなに忙しくてもお母さんも忙しいんだから手伝えだとか。

正直、母の一言、一言にイライラして

「私、受験生なんだよ。」

と何度言ったことだろう。言ってから

「あっ。」と気付いた時にはもう遅く、お

互いマシンガンのように言葉が飛んだ。

でもその戦いを終えた後、ふと思った。

自分の怒られている意味。何度私に「頑張れ。」と母は言ってくれただろうか。私を

信じてくれていて何よりも証拠になる言葉。

怒られるということは、自分への愛。

気付いた瞬間から、毎日飛び交うマシンガンの言葉もふわりと舞う羽のようになってた。

第二のおかあさんへ

かあさん、私を初めてだっこしてくれたのはかあさんでした。ママと鹿児島の家に戻ってきてからは、私のめんどうを毎日見ていてくれました。

私が二年生のとき、仕事の都合でママと離れました。私がさみしくないようかあさんとじいちゃん、時にはネコのニャンスケとふとんで寝ました。それだけではなく、今までママが作っていたご飯をかあさんは必死で覚えてくれて、ママが帰ってきてからも毎日作ってくれています。三年生になって、ゲームがへたくそなかあさんを怒ってけんかしたときは、学校に行っている間に練習してくれました。ご飯の準備に、洗たく物。毎日大変なのに笑顔なかあさんは私の尊敬するおばあちゃんです。

わがままな私を真っ正面から受け止めてくれるかあさん。いつもいつもありがとう。

私の隣

私の隣には、いつも母がいた。私が、泣いている時、宿題が終わらず、泣きながら夜中までした時。

最近、私は強がって母が夜勤に行く時の「行ってらっしゃい。」も言わなくなった。母の「行ってきます。」と玄関を閉める音が私の頭の中でこだまする。

私が、次の日、学校から帰って来ると、母は寝ている。足がはれている。私は、心が痛くなる。

私たちのために一生懸命、働いていると思うと涙があふれる。母の寝顔を見ながら、その場で立ちつくす。前は、帰って来て、すぐに一緒に布団に入り、ギューとしていた。

たまには、母に甘えてもいいのかな。どうして、大好きなのに、強がってしまうのかな。

これから、私がピンチの時に母は隣にいてくれるかな。

いつか、正直に大好きって言えるかな。私の隣は、ずっと母がいいな。

「想いを重ねる」言葉の葉

— 親から子へ —



修行と思っていたけれど

勉強しなくてあきれ果てても、憎まれ口をたたいてムカツつと来ても、泣いてばかりで手がかかって、修行、修行と心の中で唱える。つい頭に来て怒鳴りつけたり、ドアをバンと閉めて逃げ出してみたり、本気で取っ組み合いになってしまったり。自己嫌悪の中で、修行、修行と聞こえてくるふと振り返ると、この間まであんなに大変だったはずのことが、どうでも良いような些細なことだと気付く。息子の身長は私と同じぐらいになった。いつの間にか勝手に宿題をするようになった。「ありがとう。」と言ってくれるようになった。ありがとう。あなたに育てられているのは私だった。

欲張りなわたし

母子手帳の最初にページには、楽しい記録がいっぱい書き込んである。首がすわった日、はじめて歯がはえた日、寝返りをした日、はじめて歩いた日。本当に小さな一つ一つの「できた」に、純粹に喜んでいたあの頃。しかし、私の欲はどこまでも深く、成長したくさんのことが出来るようになったあなたには、さらに多くの「できた」を求めてしまう。あなたのいいところがかすむくらい、出来ないことが気にかかる。あなたが笑った、それだけで喜んでいたあの頃となんにも変わらず、あなたは私の一番大切なのに……でもやはり、あなたが「できた」と喜ぶ姿を、私はたくさん見ていきたい。

くそババアになる前に

「くそババア。」になる前に

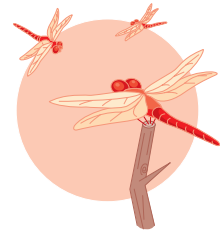
「お母さん。」になりたいな

「あっち行って。」より

「ちょっと来て。」と言ってほしいな

「何やってるの。」と言われるより

「ありがとう。」の言葉が嬉しいな



あなたの手

お母さんが元気をなくしていたあの日、

そばにいてずーっと背中をさすってくれて
いたね。

たまにトントントン……としてみたり。

背中に感じる十二歳のあなたの手は、

まだまだ小さくて、それなのに、

どこか頼もしくて

あたたかくて、優しくて

「ありがとう。」

お母さん、元気になれたよ。



お母さんとそっくりね

あなたの髪は真っ直ぐで

お母さんとそっくりね。

あなたの爪はまん丸で

お母さんとそっくりね。

あなたは素直に

「ごめんね。」と言えなくて

お母さんとそっくりね。

苦労するわよ。

一緒に頑張ろうか。ね。

おかえりなさい

小さい頃から鍵っ子だったあなた。

誰もいない自宅に帰り、心細さに泣きながら、

「淋しいよ。」

と電話がかかってきた事を今でも覚えています。

あれから数年が過ぎ、あなたも中学生になりました。

学校と部活で帰ってくるのは夜七時すぎ。私より遅い時間です。薄暗い道を帰ってくるのは心配ですが、疲れたあなたに

「おかえりなさい。頑張ったね。」

と出迎えてあげられる事が何よりも嬉しくて幸せなのです。

小言と反省

私の小言の十八番

「感謝の気持ちを忘れるな！」

あれっ・・・？

「生まれてきてくれてありがとう。」

少し忘れていたのは、私かも……。



うれしい出来事

ある夏の日の午後。

買い物に出かける途中、友だちと帰宅中の君を偶然見かけました。

道路のこっち側と向こう側で私が先に気付き、次に君が気付き、どういう反応をするかと様子をうかがっている私に、大きく手を振りながら、

「どこ行くの？」

「うん、買い物。」

「行ってらっしゃい。」

思いがけない反応に、思わず笑ってしまいました。

手もつないでくれなくなってから数年がたちますが、こういうささいな出来事で幸せを感じる母です。

あたたかい言葉

「気をつけてね。」

いつもそう言って電話を切る娘。

何気ない一言。

何よりも心に響く一言。

ハンドルをにぎる心が引き締まる。

あたたかい言葉をありがとう。



預かりもの

子供は、神様からの預かりもの。いずれは、社会にお返ししなくては。

そんな文を読んで、ハツとした。

自分の理想どおりに育たないと、イライラすることもあり、子供も、自分のやり方で進みたい。当然、ギクシヤクする。そうか、子供は一時的に預かっているだけなのだ。

預かりの期間は、高校卒業までか。

その時までには、丁重に扱わなければ。神様からの預かりものなのだから。

まちがっても、自分の思い通りにしてはいけない。

しかし、誤った方向に進まないように、見張らせてもらおう。

しっかり見張らせてもらおう。

ハイタッチ

あなたの幼い頃から続けている

「いってらっしゃい。」

「いってきます。」

のハイタッチ。

反抗期に入りかけた今でもそれは続いているね。

親子ゲンカして、頭に血がのぼっている時はお互いしぶしぶだけど……。

でも、ハイタッチするとすーっと怒りが収まるから不思議だね。

これからも元気にハイタッチ出来る親子でいようね。

反抗期

「僕、お母さんに反抗した方がいいのかな。」

真顔で、そうたずねてきましたね。

「『反抗期があった方がいい子に育つ』って、テレビで言っていたんだけど。」

上目づかいで心配そうに言われて、思わず、ぷぷっと、吹き出してしまいました。

いつかやってくるであろう反抗期。

それなりの覚悟はしていますが、もうしばらく、あとちょっと、今のままでいてほしいと、願ってしまう母です。

平成 27 年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 16,802 点 (中学生 15,449 点 親 1,353 点)

賞	中学生の部	親の部
大 賞	板 倉 沙耶佳	田 中 健 治
準大賞	坂 口 眞 子	土 橋 洋 二
準大賞	日 高 悠 我	萩 原 志 乃
優秀賞	鮫 島 さくら子	成 尾 直 子
優秀賞	松 村 直 輝	玉 利 龍 義
優秀賞	上 村 遥 香	山 下 哲 也
優秀賞	中 村 美 月	小 原 さおり
優秀賞	西 野 凌 矢	大 山 悦 子
優秀賞	本 竜太郎	中 窪 尊 子
優秀賞		上 野 智 子
入 選	二 宮 捷 馬	永 田 雅 子
入 選	福 満 陽 菜	寶 來 典 恵
入 選	坂 元 美 友	長谷川 久仁子
入 選	梶 原 実 和	大 川 智 子
入 選	岩 崎 来 南	福 田 圭 子
入 選	有 馬 妃 彩	井手上 清 美
入 選	井 川 遥 月	渕之上 美 枝
入 選	西 園 奈那子	江 口 ほだか
入 選	鮫 島 百 恵	川原園 達 司
入 選	渡 邊 菜 央	石 井 久 枝
入 選	上 村 優梨花	平 澤 美 保
入 選	福 島 乙	月 野 洋 子
団体特別賞 郡山中学校		

※ 入賞者で、了承が得られた方のみ、氏名を掲載しています。

平成 27 年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成 27 年 10 月 24 日（土） 市民文化ホール 第 2 ホール～



石踊教育長より
表彰状の授与



受賞者インタビュー

鹿児島玉龍高校放送部
生徒による作品朗読



審査委員長講評

審査員講評

審査委員長

上谷 順三郎 先生

平成二十七年度「こころの言の葉」コンクールの審査を終えて強く思うことは、やっぱり子どもも保護者もお互いにコミュニケーションを取りたがっているんだということ。また手紙という形式にしていることがそういう面を強く引き出しているのだと思います。

例えば、中学生は、素直に保護者への感謝の気持ちを書いています。一方で、兄弟姉妹への態度の違いについての不満も述べています。また両親の姿に理想を見ている子もいれば、親子としてこうありたいという願いを書いている子もいます。そしてできれば、けんかをしてでもいいので「顔を合わせて」話したいと強く訴える子もいます。

保護者の手紙では、生まれてきてくれたことへの感謝を述べたり、親としての反省を書いたりしています。多くは、子育てによって自分が学んだり成長させてもらったかのように書いています。そしてやっぱりできれば「真正面から向き合いたい」という気持ちをのぞかせています。

今回、父親からの手紙も増えました。照れた感じがにじむ文面には、娘に対する正直な思いがあふれています。男子生徒からの手紙にも印象的なものが多くありました。直筆の文字にも言葉遣いにも、女子とは異なるメッセージが込められていました。そういった、今の家族の姿が、心の声が、この作品集には収められています。家族の心の交流アルバムとして読み続けて欲しいと思います。

鹿児島大学教授

大浦 慶子 先生

今年も「こころの言の葉」に多くの作品が寄せられました。どの作品も心を揺さぶられるものでした。それぞれの家庭での営みが、伝わってくるようです。お互いを思いやる家族の姿にもいろいろあるようです。

- ・本当は、甘えたいのに。
- ・本当は、どうして良いのか分からないのに。
- ・本当は、相談したい、聞いて欲しいのに。
- ・本当は、感謝しているのに。
- ・イライラの原因は、他にあるのに……。

親子だから、家族だからぶつかり合える。ぶつかり合って気付くこと、分かり合えることがある。ちょっと離れて客観的に見てみると成長している我が子に気付くことがある。お互いが、自分を見直す時間が必要に思えます。

テレビや新聞等では、今年も痛ましい事件が報道されています。自分の将来や交友関係に悩み、自分を見失いそうになっている子供たち、苦しい家庭状況の中で、必死に生きようとしている子供たち等に、何ができるのか、どんな声かけや支援が必要なのか考えさせられます。

「こころの言の葉」は子供と大人になろうとする狭間で悩む子供の心や姿、保護者の思いや苦悩を共有することができる作品集です。ぜひ、多くの人たちに読んでいただき、自立し、これからの社会を担っていく子供たちを温かく見守り、時には、手をさしのべてほしいと思うことでした。

市教育委員会スクールカウンセラー

遠藤 陽子 先生

私たちは、意識する・しないに関わらず言葉の中で生活をしています。だからこそ、想いを言葉に乗せる喜びや難しさを幾度となく感じてきたことがあるのではないのでしょうか。

いつまでも甘えん坊だと思っていた我が子が、ある日突然親の手を振りほどき自分の足で立とうとした時、親は子供に発した言葉や態度が間違っていないか自問自答し、子育ての難しさを痛感させられます。また、子供達は自分なりに考え、学び、成長していく中で親の言葉に疑問を抱き、反抗せずにはいられない。そんな誰でも一度は経験したことがある親子の葛藤が文章には溢れています。

言葉とは受け手の気持ちひとつで最高の褒め言葉にも最悪の凶器にもなります。こうして手紙を書くことで感情が整理され、普段考えもしなかった相手を想う本当の気持ちに気付いた瞬間があったのではないのでしょうか。

昨今、感情表現が苦手な子供が増えたと言われる中で、子供たちが親へ宛てた手紙には葛藤とともに感謝の気持ちが素直に綴られています。また親からの手紙には、子を想う愛情と親としての覚悟も感じられ胸が熱くなるものもありました。

「こころの言の葉」は手紙を介し、親子の関係を見つめなおす役目を持っています。多くの方が様々な親子の繋がりを感じ、それを自身の親子関係に結び付けていただけたらと願っています。

フリーアナウンサー

坂口 洋文 先生

作品の審査では非常に悩みました。どの作品にも、中学生時代の赤裸々な親子の心情が盛り込まれ、私にはよく理解できたからです。

半世紀余りも昔のことですが、中学生の私にひどいことを言われ深く悲しむ父母の顔を今でも鮮明に覚えています。また、三〇年ほど前、今度は自分が親となり思春期の子育てに苦労したことも昨日のように思い出します。

ただ、人生の折々に思い出されるこれらのことは、その後の自分を律し自分の生き方を見つめさせてくれた一面があるのではと、今思うようになりまし。中学時代の親子の触れ合いは深く心に刻まれ繰り返し思い出されて、その後の人生に影響を与える大切なものとなるのだと思います。

この作品集を是非読み味わってください。子供が親のどんなことに、親が子供のどんなことに、喜び・悲しみ・怒り……を感じているのか。どんなことをお互いが願っているのかなどを読み取ってほしいと思います。そして、改めて親はわが子を、子はわが親を見つめる機会としてくださればありがたいです。

多感な中学生時代に、深く「子が親を思い、親が子を思う」機会を持つことは、その人の人生において極めて大切なことだと思います。そのことで、きつと一生の宝となる大事なものがお互いの心の中に宿ることでしょう。

親子の深い絆が結ばれ、一人一人の中学生や親たちの豊かな人生が開かれるために、この作品集が力になることを願っています。

元中学校校長

神野 佳也 先生

昨今、少子高齢化による人口構成の変化に加え、グローバル化、情報化など、子供たちを取りまく家庭や地域の環境は大きく変化しています。また、いじめ、不登校、校内暴力の低年齢化など子供たちをめぐる様々な問題の背景として、地域や家庭教育の低下が指摘されています。私たちがかつて幼少期を過ごした頃は、子供たちは家庭・学校・地域と深く関わり、時には厳しくも豊かな心と思いやりのある周囲との関わりの中で育ってまいりました。現在は、溢れかえるモノと情報に、何が正しいのか？どう生きればいいのか？大人である私たちがさえ悩んでしまう時代になってきています。また、情報の波に漂うように生きることがあたりまえのような現代社会において、子供たちが実感をもって学ぶ・働くことをイメージすることが困難な時代だと言われています。見栄えのある華やかさだけが求められ、一方では地道な努力や我慢することが、何か格好悪いことであるように思われているのではないかと感じています。

私は、昨年度に引き続き「こころの言の葉」を審査させていただきまし。日常生活の中で繰り返される親子の会話や、日頃は思っても伝えられない言の葉たちから、同世代の子供を持つ保護者の一人として感動をいただきました。そして、子供たちは私たち大人の生きざまや言動を純粋な心と目で見つめていることに驚かされました。また、子供の健やかな成長と幸せを親が願っていることを実感しました。

「こころの言の葉」は、家庭の絆を深め、子供の豊かな成長と親子の心の交流の架け橋になっている素晴らしい作品集であると思います。

最後に、審査にあたり、素晴らしい作品を寄せてくださいました方々への感謝と、今後この素晴らしい事業が存続されていかれますことを願います。

市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様の御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十三集が完成しました。過去最高の応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。特に親の部の応募が四年連続で千点を超えました。このことは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」にとつて、大きな意義があると思います。

今回、保護者の応募作品を整理しているときに、一枚のメモを見付けました。メモには次のような文章が書かれていました。

「上の子の時も、下の子の今年も、メッセージを贈る機会をつくっていただき、本当にありがとうございます。このメッセージを書いてる時は、日常の忙しさで忘れてしまっている親子の強い絆を改めて感じ、明日からまたこの子たちのために少しでも優しい気持ちで、素敵な母親を目指そう♪ そんな気持ちになれる大切な時間です。本当に心から感謝しています。ありがとうございます。」

それぞれの作品はもちろんです、こんなふとしたメモにも温かい思いが込められているこのコンクールは、本当に多くの市民の皆様に支持されているのだと、編集冥利に尽きる思いでした。掲載されている作品一編一編に込められた親子の思いを、じっくりと味わっていただければ幸いです。

本年度の団体特別賞は、郡山中学校が受賞しました。PTAと連携することで、優れた作品が数多く出品されていることなどの理由から今回の受賞となりました。この取組は、親子の心の交流を図るために、本事業が活用された好例と言えるでしょう。

来年度も、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでいきたいと思っております。事業の趣旨を理解していただき、さらに多くの素晴らしい言の葉が寄せられることを心からお待ちしています。

こころの言の葉

～第13集 伝われ つながれ この思い～

平成28年2月5日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099)227-1941 FAX (099)227-1923